一生懸命

和牛繁殖農場を新規開設し理想とする飼養環境を実現

宮城県登米市の冨栄（とみえ）隆さんは非農家出身ながら、新規の和牛繁殖農場を始めた。母牛・子牛用の牛舎には壁を設けず、育成牛はビニール製のハウス牛舎を利用するなど、独創的な手法で設備投資を抑えるとともに、牛が農場内を自由に行動できるようにする事で、ストレスフリーの飼養環境を構築。新規就農を考える若い世代に大きな希望を与える役割も果たしている。

全国の肥育農家に健康な子牛を提供したい

高級ブランドとして名を馳せる「仙台牛」の約4割が生産される宮城県登米市は、県の北部に位置し和牛の一大産地として知られている。

その登米市にある冨栄ファームは、２０１９年1月に開設されたばかりの、黒毛和牛繁殖農場だ。代表の冨栄隆さんは非農家の出身。以前は自動車と農機具の修理工場に勤務していたが、09年より、奥様の実家が登米市で営む和牛繁殖・肥育一貫農家で働くようになった。

「妻の母が体調を崩して人手が足りなくなった事を受けて農場をサポートしたところ、牛を育てる仕事に大きなやりがいを感じ、やがて自分の農場を開きたいという夢を描くようになりました」

10年ほどかけて牛飼いの仕事を体得していくうちに、冨栄さんは農場の運営に際して独自の方針を温めていた。それは、繋ぎ飼いで管理するのではなく、農場内を広く自由に行動できるストレスフリーな環境を与えるというものだ。その飼養法は、奥様の弟で獣医師である佐々木和明さんが提唱し、実家の農場でも一部行ってきたものである。その考えに賛同した冨栄さんは、自らの農場で徹底的に実践し、自分でも元気で健康な子牛を育てたいと考えるようになった。

5反歩の敷地は、自身の土地を利用。牛舎の建築と母牛の購入費用は、日本政策金融公庫による新規就農者支援融資制度で賄い、妊娠牛を含む10頭あまりの母牛を導入しての繁殖事業をスタートさせた。その後少しずつ増頭し、現在は23頭の母牛を飼養。将来的には30頭程度まで増やす計画だという。

「今年4月に、当農場で生まれ育った子牛を初めて市場に出し、栃木県の肥育農家の方に落札された時は、ほっとしました。地元の宮城県だけではなく、広く全国の肥育農家に健康な子牛を提供したいという思いを抱いています」

牛舎デザインは、竹ひごと割りばしで模型を作ってイメージを固めた。使用木材は山側の敷地から調達したという、冨栄隆さん（写真右から３番目）。奥様の奈美さん（右隣）、長男の尚真さん（前列左から２人目）、義弟の佐々木和明さん（左端）と、関係者の皆さん

冨栄ファーム

宮城県登米市米山町字善王寺朝来前104
従業員／1人
飼養頭数／繁殖和牛23頭、育成子牛18頭

牛たちの生き生きとした姿を眺められるのが最大の喜び

冨栄ファームの母牛と子牛用のメイン牛舎は、屋根を柱で支えているだけで、外壁がない。牛舎内で寝起きして餌を食べた牛は、好きな時にいつでも外に出て行ける。存分に運動できるこの環境が、母牛と子牛の健康増進の原動力だ。牛舎内には分娩用のスペースなどはあるものの、仕切りは設けられていない。簡素な造りにした事は、牛舎の建設・維持費の低コスト化と、1人で農場全体を管理する冨栄さんの負担軽減のための手段ともなっている。

牛房には、常に粗飼料と配合飼料をふんだんに用意。子牛の健全な発育を促すには、食べたいものを好きなだけ食べさせる事が大切だと冨栄さんは言う。

「分娩も基本的に牛に任せており、私が手を貸したのは、産道が狭く難産となった初産の母牛と、逆子が産まれた時の2回だけです。母牛がたっぷり運動する事はスムーズな出産にもつながるようで、分娩時の事故は一度も起きていません」

ただし、飼養管理の全てが放縦というわけではない。4カ月齢になった子牛は母牛から離す。粗飼料は引き続き飽食のままだが、配合飼料は規定量しか与えないようにする。5カ月齢になると、メイン牛舎の隣にあるビニール製のハウス牛舎に移され、出荷されるまで過ごす事になる。この期間はハウスの外に出る事はできないが、その目的は冨栄

冨栄ファーム　代表　冨栄隆さん

ファームのようには自由に振る舞えない肥育農家での今後の生活に慣れさせる事にある。

義理の弟である佐々木さんが種付けをした母牛も無事に妊娠しており、今後は雌牛を繁殖用に自家保留しながら、各母牛が年1産のペースで子牛を産むサイクルが確立される。

開設時からここまで順調に農場を運営してこられた要因の1つとして、冨栄さんはJA全農北日本くみあい飼料株式会社によるサポートが受けられた事を挙げる。

「スターター、子牛・育成牛用、母牛用とステージに応じた配合飼料が供給され、的確な給餌プログラムが組まれているので、安心して食べさせる事ができます。分娩前後の母牛については、餌を増やしても痩せたり、制限しても太ったりするケースがありますが、飼料をどれだけ増減するべきかアドバイスをしてもらえるので、本当に助かっています」

昨今は新型コロナウイルスの影響で素牛価格が急落しているが、「念願だった自分の農場で、毎日牛たちの生き生きとした様子を見られるだけでも幸せを感じます」と、冨栄さんは顔をほころばせる。

新規就農希望者のサポートで畜産業を活性化させる

粗飼料は全量を購入しているが、最近牧草地を借り入れた冨栄さんは、チモシーの一部を自給しようとしている。また、農場で産まれる子牛の数が増えて育成牛用のハウスが手狭になりつつあるため、ハウスの増設も検討中だ。

「当農場で管理できる母牛は30頭ほどが限界です。もともと独りの力で可能な範囲で繁殖農場を運営する事が目標だったので、飼養規模をこれ以上大きくしようとは思いません」

そう語る冨栄さんは、新規就農を望む若い世代の道標になりたいとも考えている。

「冨栄ファームは、非農家出身者でも農場を開設し、経営を軌道に乗せられる事を証明しました。これをモデルケースとして新規就農にチャレンジする人が増えれば、畜産農家の減少に歯止めをかける事が期待されます」と、獣医師として農業高校の実習指導にも携わる佐々木さんは話す。冨栄さんと佐々木さんは、この経験と知見を活かして新規就農希望者にアドバイスする「ファームプランニング」のノウハウも確立し、地域ひいては全国の畜産業の発展に尽力したいという展望を抱いている。

地元、JAみやぎ登米の菅原悠人さんは「冨栄さんのような存在はとても心強いです。新規就農

①子牛用には、スターター、育成配、チモシー、TMRと複数の餌を揃えている ②5カ月齢から出荷までを過ごすハウス牛舎 ③牛が思いのままに過ごせる環境づくりに力を注ぐ ④育成牛用の配合飼料 ⑤⑥どの母牛も坂道の上り下りで足腰が丈夫だ

者を増やすためにも、今後は地域をリードしていただきたい」と期待を寄せる。

またそうした姿勢に共感する冨栄さんの長男の尚真さんは現在、北海道の大学の獣医学部に在学中。夏休みなどの帰省時には農場の仕事を手伝い、父から和牛の飼養管理や繁殖ノウハウ、佐々木さんから獣医になるための心構えなどを学んでいる。

「大学卒業後は父の農場の経営を引き継ぎ、その傍ら獣医として近隣の農場の牛の健康をチェックしたり、牛がより快適に過ごせる環境を整備してもらうためのアドバイスを行うといった活動にも力を入れたいと考えています」と尚真さん。

頼もしい後継者の存在は、農場の新規開設という困難な道を進む冨栄さんにとって大きな励みとなっている。

のびのびできる環境で育った元気な子牛は、肉も美味しくなるはず。その事を実証し、多くの肥育農家から信頼を勝ち取るのが、冨栄さんの目標だ。